

『失敗学のすすめ』

畑村洋太郎 著 講談社 1,680 円 (税込)

「失敗学のすすめ」のススメ

会員 宇敷 崇広 (64 期)



失敗のプラス面に着目

今回私が皆さんに紹介したいのは、畑村洋太郎著「失敗学のすすめ」という本である。著者は現在、政府の東京電力福島原子力発電所における事故調査・検証委員会委員長も務めている人物であり、ご存じの方も多いかもしない。

この著書は、その名の通り「失敗学」という学問分野に関するものである。

「失敗学」とは、政府や企業が起こした膨大な数の事故や不祥事などのいわゆる失敗事例を研究し、失敗の種類・特性・原因を体系化し、学問の分野として確立しようとしたものである。

そういうと難しく感じられるかも知れないが、本著は学術書のような専門書ではなく、一般の人に分かりやすいように書かれた本である。

膨大な数の失敗事例を研究し、失敗を種類ごとに階層化して整理し、失敗情報の伝達の特徴などまで検討している点では、今までにない新鮮な印象を受け、興味をそえられる内容となっている。

本著でもっとも強調されていることは、失敗を否定的に捉えるのではなく、失敗のプラス面に着目してこれを有効活用して利用していくという姿勢である。

つまり、失敗の特性を理解し、不必要な失敗を繰り返さないとともに、失敗からその人を成長させる新たな知識を学ぼうということであり、これこそが「失敗学」の趣旨とされている。

「失敗から学ぶ」の落とし穴

「失敗から学ぶ」「失敗は成功の母」という言葉は、広く使われている言葉であるが、本当に失敗から学び

その経験を活かしきれているかとなると難しい問題である。

社会全体を見れば、企業の不祥事は繰り返されており、今回の震災問題についても、阪神淡路大震災の失敗や過去の津波からの経験が活かし切れていなかったようである。

失敗を個人の問題としてとらえても、失敗を次に活かすということは重要であるが難しい問題である。

本著は、この点についても具体的に研究し、失敗の活かし方についても示唆に富んだ内容となっている。

本著で特に強調されている考え方が、「経験の知識化」という考えである。これは、失敗の経験から学んだことをいかに自分の知識として身につけることができるかが重要であり、これは単に失敗を反省しているだけで身につくものではないとされている。

一般的には、1度失敗をしてその経験をすれば、今後はその失敗は防げるとの過信が無意識にできてしまう。しかし、これが落とし穴で、いかにその経験を知識化していわゆる体感して覚えた知識とし、さらにこれを仲間と共有していくことが大切であり、本著ではこの方法についても具体的に検討している。

本著は、「失敗学」というあまり馴染みがない分野に関する本であるが、それだけに新鮮で興味深い。

そして、この本のテーマである「いかに失敗から学び、自分の経験を知識化し、致命的な失敗を防ぐか」というテーマは、仕事の中にも活かすことができる内容となっている。

多くの人に興味をもって読んでもらえるお薦めの1冊である。